

常磐線神立駅付近を走る仙台行特急「ひたち3号」の車窓には、盛夏の茨城を象徴する風景が広がっていました。手前一面を覆う深い緑は、日本を代表するレンコン産地として知られる霞ヶ浦周辺の広大なハス田です。丸く大きな葉の間には白いハスの花が数え切れないほど咲き、走行中の列車からも次々と目に飛び込んできます。夏の日差しを受けて揺れるハス田は、水田とはひと味違う独特の景観をつくり出し、この地域ならではの農村風景を彩っています。

そのハス田の向こうには、茨城県のシンボルである筑波山が雄大な姿を見せています。写真中央には、男体山と女体山が並ぶ特徴的な双耳峰がくっきりと浮かび上がり、遠景でありながらひと目で筑波山とわかる美しい山容です。平野が広がる関東では山が大きく見渡せる場所は意外に限られますが、この区間では広い田園越しに筑波山を望むことができ、鉄道の車窓ならではの開放感を味わえます。ハス田と名峰が織りなす眺めは、茨城県を代表する景観の一つといえるでしょう。

常磐線は首都圏と東北地方を結ぶ幹線ですが、土浦から神立にかけては都市近郊とは思えないほど豊かな農業景観が続きます。レンコンの栽培が盛んなこの地域では、秋から冬には泥の中からレンコンを掘り出す作業風景も見られますが、夏は葉と花が最も美しい季節です。疾走する「ひたち3号」の車窓から、白い花を点々と咲かせたハス田、その向こうに堂々とそびえる筑波山を眺めていると、霞ヶ浦の恵みと関東平野の広がりを実感できます。実に、夏の茨城らしさが凝縮された、印象深い車窓風景でした。

(2026 年 7 月下旬／常磐線神立駅付近)

